

食の安全と、 発達障害の子供たちの可能性

辻安全食品株式会社 代表

辻 幸一郎 つじ こういちろう



聞き手

室舘 勲 むろだて いさお

(株式会社 潮流社)
代表取締役社長



辻 幸一郎 氏

——辻幸一郎社長は、食物アレルギー対応の食品会社、辻安全食品株式会社を運営されていらつしゃいます。JALやANAの国際線の機内食に、辻安全食品の食品が採用されているそうですね。本日は、食べ物と人間の健康との関係などをお伺いしていきたいと思えます。

辻 航空機は「世界で最も危険な食堂」とも言われるほど、機内食には大変に気を使わな

ければなりません。なぜなら、航空機という閉鎖空間で乗客が機内食を食べて、アレルギーやアナフィラキシーショックを発症してしまったら、救命が非常に困難だからです。食事に関して万が一の事故も許されないのが機内食です。弊社の食品を採用してから十年以上経ちますが、世の中のアレルギー患者数が増えている中で、機内食での事故は一度も起こっておりません。

——それは素晴らしいことですね。辻安全食品のこれまでの歩みをお伺いできますか。

辻 辻安全食品株式会社は、父が創業した会社です。父はもともと大手ゼネコンのエンジニアをしておりました。腕っぶしの強い、豪快な父でした。しかし、多忙な業務と接待による、ムリな生活習慣がたたって内臓不全で倒れてしまいます。入院後、父を待っていた

のは薬漬けの日々でした。何十種類の薬を飲み続けても体調は回復せず、父も死を覚悟したと言っています。しかし母は諦めずに様々な治療法を模索しました。現代で言う食事療法、自然医学の先生に出会い、父の今までの食生活を一新します。食品添加物や白砂糖などを排除し、玄米菜食を実践しました。するとなんと半年で、機能不全に陥っていた内臓器官が回復し、日常生活を取り戻しました。回復した父は、自身の経験から「世の中のどれだけの人が現代食の食品添加物などによって身体を壊してツライ思いをしているのだろうか」と考え、食の安全を広めたいという想いで、一九七九年に「辻安全食品株式会社」を設立します。四十二年前の当時は、食の安全や健康食は理解されず、無農薬野菜や無添加食品などは不良在庫となっていたようです。

そうやって休みなく奮闘する父の姿を見て育ちました。

——四十二年前から食の安全の事業を。それは大変なことだったと思います。辻社長はどのように経営に関わっていったのですか。

辻 私は大学卒業後、医療機器商社のサラリーマンをしており、辻安全食品の経営には携わっておりませんでした。すると二十九歳の時に父が、過労に伴う心臓発作で倒れました。病院で横たわる姿を見て、あんなに強かった父がやけに弱々しく見えました。創業当時に父が奮闘する背中を思い出し、私も自分の人生のビジョンなどありましたが、それよりも父の志を絶やしてはならないという想いから、その時に辻安全食品を継ぐことに決心しました。

——お父様の入院をきっかけに決意された。

者さんをケアすることになりました。すると、ダウン症や自閉症と診断され、治らないと言われていた子供たちの症状が改善し、生き生きとしていく姿に出会いました。同様にその後、スポーツ選手のパフォーマンス向上、美しくなりたい女性のインタビュートイの分野など、様々な分野で安全食品が求められ始めたのです。

——各方面で求められ始めた。

辻 これは、特別に探究して広げたわけではなくありませんし、特殊な食材を開発したわけでもありません。様々なお客様が、健康や食に関する相談を持ってきてくれて、ちよつと難しい宿題をくださって、それを一つずつクリアしていくうちに、様々な方面での仕事が増えていきました。アメリカ大使館からも引き合いがあり、自閉症などの精神面での疾患も、

辻 一九九九年に正式に辻安全食品の社員となりました。アレルギー対応食品のバリエーションを増やしたり、先述の国際線機内食を開発したり、アトピーの改善に寄与する食事の開発など、事業を追求していきました。そうした矢先、二〇〇九年に会社の創業三十周年を祝う会の開催から数日後、父が心臓発作で急逝しました。突然の出来事に驚く暇もなく、私は代表に就任することになったのです。

——突然の出来事でしたね。

辻 代表に就任してから、辻安全食品にとっても一つの転機がありました。それまではアトピー、アレルギー対応の食品の開発に主に取り組んでいました。その食品たちが、様々な方面で求められ始めたのです。

ある時、ダウン症や自閉症の子供たちに向けた食事を作っているとある協会と一緒に患

食事で治そうという発想で選ばれていきました。その基礎となったのは、父が作ったノウハウ、食品、食事の作り方です。そもそも辻安全食品は「アレルギーフリー」や身体に良いものを、という食品をずっとやってきていて、創業した四十二年前から無農薬野菜、化学物質を使っていない肉や生活用品などを扱ってきました。いまでもこそ、ヴィーガン食品やグルテンフリー食品などの健康食は市民権を得ていますが、我々が取り組んでいた四十年以上前の認知度は全くありませんでした。三十年ほど前から徐々に「アレルギー患者が増えているのは、どうやら食べ物が増えちゃいけないか」と主張をする先生方が増えてきました。それでも、食べ物で治療に取り組むことは、保険適用事例も少なく医者も多くは活用しない場合が多いです。そういった手法は医

学における邪道である様な扱いを受けていました。食事で病気が治るなんて、辻安全食品はただのオカルト企業だと揶揄されたりもしました。

——なかなか理解を得られなかった。

辻 小麦を使わないビスケットや、大豆を使わない醤油、卵を使わない卵焼き、乳製品を使わないアイスクリームなど。業界で先駆けて作り始めたと記憶しております。そうしてアレルギーのケアのために作ってきた食品が、今では様々なチャンネルの方たちにも貢献していることは非常に嬉しく思います。

——いまではセレブ層を始め、多くの方が自然食や健康食を求めていますね。

辻 私はずっと、日本を良くしていきたいと思ってきました。しかし直接日本を変えることは難しいです。ですので、日本の将来を担

う子供たちの健康に貢献することが大事だと考えています。

今後の日本の超高齢社会において、元気な子供が増えていくことも大事です。アレルギーに苦しむ子供たち、発達障害やダウン症を抱える子供たちは増えています。本来、子供たちはもともと元気な状態でいられるはずなのに、食事や環境、生活習慣によって皆、病気が増えているのです。発達障害やうつ病と診断され、精神病患者として向精神薬を処方されて、子供が不調にさらされています。これは日本の将来の危機でもあります。

——子供たちの不調が増えている。

辻 でも彼らも、薬ではなく食事や生活環境の改善によって、症状が改善できるのです。たとえばダウン症や自閉症と診断された子供たちと、山や海といった自然の中でキャンプ

を実施すると、眼を見張るほどの改善がされます。野外活動が子供たちの発達障害などの改善につながるということです。これは子供たちに限らず、アルツハイマーに認定された高齢者も、同様に改善が見られました。自然

の中の活動は、バリアフリーの真逆ですよね。でもその人間的な生活によって、高齢者も脳が活発に働き、身体も動き始めます。何も喋らなかつたおばあちゃんがどんどん喋り始める。人間の脳は健常者でも一〇%程度しか使っていないと言われています。たとえ体調が悪くても脳は大きな可能性を秘めています。脳梁全欠損のお子さんを改善させたという事例もありました。子供たちには、自然の中

で出会う「知らないこと」などの刺激から脳が急に動き出します。高齢者には、バリアや障害物を与えたら生きる力がどんどん溢れ

出していきます。人間にはすごい可能性があるんだということです。

——脳自体も改善する可能性があるのですね。
辻 体調を崩した高齢者が、建物の中でずっと寝たきりでいたら認知症になってしまうのも当然です。たとえ元気な方でも、一週間閉じこもったら弱ってしまいます。身体が弱っている人に拘束を強いることは、さらに悪化するしかありません。ではいかに改善させていくか。自然の中で、障害をクリアしながら、人間をどんどん良くしていく。これは口では言うことは簡単かもしれませんが、高齢者や、動き回る子供たちを山に連れて行くのは非常に大変です。子供も高齢者も、自然の中で面倒を見ることが非常に難しいから、事例が少ないのです。しかし、このキャンプを実際にやると「発達障害という障害者は一人もいな

いー」と思います。人間は可能性に満ちていますし、それぞれの子供たちの持つ個性だと感じています。

——子供たちには皆、可能性があると。

辻 子供たちの可能性を開くために、国や政治が取り組むべきことは、アグリカルチャー、自然との共存の機会を提供することです。農地は一、二年放置すれば使えなくなり、耕して生産してこそ活きるのです。人間が自然の環境で自然農法で食材を生産できれば、従事する人間も生産された食物を食べる人も健康になっていきます。そうすれば日本もどんどん良くなっていきます。

——農業についても課題が多いですね。

辻 農薬や食品添加物に対する規制が、日本は圧倒的に遅れています。政治においては、利権や経済性だけで判断するのではなく、国

それぞれを個性として認める社会を作りたいです。

彼らの個性が活きる場で生きていける方法を模索するべきです。ダウン症などの子供たちが成人して社会参加をしようと考えたときに、健常者と同じように都会で働いて、健常者と同じように給料上げていくということは難しいかもしれない。でも彼らには彼らのできることがあって、生きる場所があります。大手町や丸の内じゃ難しいかもしれませんが、山の中で、自然の中で、生き生きと力仕事をし、輝けるんです。実際に、北海道や九州に広大な農地や村を作って、そこで米や小麦などの作物を作って生きていける場を設けている企業もあります。ぜひ彼らの意見も聞いて、その動きを支援できる国家であってほしいと思います。ぜひ、国民と政治家が共に、こう

民の健康を守るために適切な規制を設けていただきたいと思います。合わせて、食品添加物の教育や、農業の問題点の教育、地球環境の教育など、適切な情報開示を子供たちや親たちにするべきだと考えています。

——おっしゃるとおりです。最後に伝えたいことはありますか。

辻 私は、多くの精神障害は必ず改善すると思っています。念を押して伝えたいのは、障害や病気と言われるものも、すべて個性の一つだということ。そして、彼らはすごい能力を秘めた子供たちだということです。ダウン症は、顔や言葉や行動に特徴はあると思いますが、ただ、それを否定してしまつたら、その子の未来はすべて終わってしまいます。ある枠から外れたら「障害者」と位置づける風潮ではなく、認めることから始めてほしい。そ

いった問題点や課題点を捉えてほしいです。「地球を救う」などということは、一介の食品屋が言うことではないかもしれませんが。ただ、居ても立ってもいられないのです。今後、も微力ながら、地球を救うプロジェクトを、各方面の方々と進めていきたいと思っています。

■つじ・こういちろう■

一九六八年生まれ。

大学卒業後、医療機器商社に入社。

一九九九年 辻安全食品に入社。

二〇〇九年 代表に就任。

食物アレルギーの改善をはじめ、女性のインナービューティ、アスリートのパフォーマンス向上など、食に関わる数々の課題解決における啓発活動を展開。

大学、専門学校、その他各種セミナー講師など講演活動も多数。